

思考力・判断力・表現力を高める社会科教育の実践  
—ICT機器の効果的な活用を通して—

新発田支部 新発田市立七葉中学校  
六井 啓一郎（平成28年度）

【主張】

中学校学習指導要領（平成29年告示）では、知識・技能を活用して、課題を解決するために必要な「思考力・判断力・表現力」を育むことが明記されている。特に社会科では、様々な資料を適切に収集し、活用して事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに、適切に表現する能力を育てることが求められている。

そこで、GIGAスクール構想に伴い導入された一人一台のタブレット端末を効果的に活用し「学び方」を身に付けさせ、自ら考え、発信し、学び合える学習活動を工夫することによって、生徒の思考力・判断力・表現力は高まるであろうと考え、実践を重ねてきた。

タブレット端末の導入後、約3年が経過し、各教科・領域等で積極的に活用を進めてきたが、「タブレットでなければいけない理由が見えない」「タブレットの効果が伝わらない」とのご指摘をいただく場面も多い。今回の発表では、「タブレットだからこそ、効果的に学び方が活用できる」ことを意識して行った実践およびその成果を紹介したい。

## 1 研究主題の設定

私が七葉中学校に赴任した令和3年度時、当校の生徒は、社会科への興味・関心が高く、授業にも意欲的に取り組むが、NRTの偏差値ではどの学年も全国平均を下回っていた。4月に行った社会科についてのアンケートでは「学んだことをレポートや表などにまとめること」について約80%の生徒が苦手意識を持っていた。

また、授業の様子や定期テストの結果から、重要語句を覚えることには意欲的に取り組み、成果を上げるが、多くの生徒が事象の意味や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、資料から読み取った内容を自分の言葉で説明したり、複数の資料を関連付けて考えたりする課題に苦手意識をもっていた。「思考力・判断力・表現力」の育成は、喫緊の課題であった。

生徒の「思考力・判断力・表現力」を育むために、本研究では一人一台のタブレット端末（以下、タブレット）を活用する。生徒の多くが、タブレットの利用に高い興味・関心をもち、意欲的に操作する姿が見られることから、「可視化」「比較」「関連付け」「発信」「共有化」等の「学び方」をタブレットを用いて、効果的に活用させることにより、生徒の思考の深まりや広がり、伝える力の高まり等が期待される。

## 2 研究仮説

タブレット端末を効果的に活用し、「学び方」を身に付けさせ、自ら考え、発信し、学び合える学習活動を工夫することによって、生徒の思考力・判断力・表現力は高まるであろう。

※本実践における思考力・判断力・表現力の定義

「思考力・判断力」・・・社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力

「表現力」・・・思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力

## 3 研究内容

(1) 対象生徒 新発田市立七葉中学校 令和3年度入学生41名 ※実践①・②・④  
令和4年度入学生37名 ※実践③のみ

(2) 検証方法

① 各単元の思考力・判断力・表現力の評価問題の正答率の検証【定期テスト】

② 「資料の読み取りや、自分の考えを表現することがしやすくなった」「課題に対する自分の考えをもてるようになった」と評価する生徒の割合の検証【アンケート】

③ 授業における生徒の記述の変容の検証【成果物の評価】

## 4 研究（授業）の実際

(1) 令和3年度の実践

① 世界の諸地域「アジア州」

ア 課題 アジア州の気候には、どのような特色が見られるのだろうか

イ 研究仮説を具現化するための手立て

「精選した資料に基づいた分析を行わせる」

教科書に掲載されている雨温図を、タブレット上でワークシート化し、気付きを記入させた。低位の生徒も意欲的に取り組んだ。また、自ら教科書の別資料（他地域や日本国内の雨温図等）と比較し、複数の資料を比較して説明する記述が多く見られた。

「資料から読み取った内容を共有し、別の資料と関連付けて考えさせる」

提出箱にシートを提出させ、大型テレビで全体共有した。雨温図の分析では「夏の気温が高い」という気付きと「夏の降水量が多い」という気付きから、「夏はジメジメする」という意見が出た。ここで、季節風の風向きの資料とアジア州の地勢図を提示し、関連付けて言えることはないか考えさせた。その結果生徒は、海からの季節風の影響を受けて「夏はジメジメ」になること、南アジアではその影響がさらに顕著であり雨季や乾季が見られること、ヒマラヤ山脈以北では季節風の影響を受けないことを自ら見出すことができた。

## ② 世界の諸地域「ヨーロッパ州」

ア 課題 統合を進めてきたEUでは、どのような課題が生じているだろうか

イ 研究仮説を具現化するための手立て

「精選した資料に基づいた分析を行わせる」

課題発見に必要と思われる資料を前もって選定し、生徒にタブレットで配付し、気付きをカードに記入させた。多くの生徒が複数の資料を関連付けて考えることができた。

生徒の記述（抜粋）

- ・ヨーロッパの中にも経済的に豊かな国と貧しい国との間で格差があり、貧しい国から豊かな国への移動が増えている。
- ・経済的に豊かな西ヨーロッパの人々の負担が増えているのではないか。

「学習の前後の自分の考えを比較させ、自己の変容を捉えさせる」

本単元では、単元を貫く問いとして、「イギリスはなぜEUを離脱したのか」を設定した。学習前の予想では資料を基にしていなかったため、漠然とした記述が目立ったが、学習後には、図6の資料から読み取った根拠に基づいた記述や、東西ヨーロッパの国々の立場や経済面・政治面等を意識した多面的・多角的な思考による考察が多く見られた。

学習前の生徒の記述（一部抜粋）

- ・他のヨーロッパの国と仲良くするのが面倒になったから。
- ・他の国とトラブルになったから。
- ・メリットよりもデメリットが増えてきたから。
- ・たくさん国がある中で、EUという一つのまとまりに統一しようということに無理が生じたから。



学習後の生徒の記述（一部抜粋）

- ・発足当初は良かったが、2000年代になって比較的貧しい東ヨーロッパの国々が加盟すると、イギリスなど西ヨーロッパの豊かな国で支える必要が出てきて、負担に感じたから。
- ・国民投票で離脱を決定したが、差はとても小さく、若者は離脱に反対で、高齢者の賛成が多かった。また、ロンドンやスコットランド、北アイルランドでは反対派が多かったことから今後イギリスがEUにふたたび加盟する可能性もありそう。
- ・貧しい東ヨーロッパの人々が豊かな西ヨーロッパに移住したくなる気持ちはよく分かった。しかし、それにより東ヨーロッパの経済はさらに悪化するのではないか。
- ・EU内では関税がなく、共通通貨の使用や航空機の製造分業などが行われているが、その反面、それぞれの国の経済の自由が制限されているように感じた。自由が制限されることで徐々に息苦しくなって離脱することになったと思う。

記述の際にはクラゲチャートを用いて資料から読み取った内容を整理してから書かせた。このようにキーワードを整理し、結びつけることで複数の資料から多面的・多角的に読み取った内容を組み合わせる様子が見られた。

## (2) 令和4年度、令和5年度の実践

令和3年度の実践後、「タブレットでなければいけない理由が見えない」「タブレットの効果が伝わらない」とのご指摘をいただいた。そこで令和4年度、令和5年度は、「より効果的なタブレットの活用」を研究のテーマに加えて、実践を行った。

## ③ 人々の生活と環境（中1・地理的分野）

ア 課題 世界各地の人々の生活は、自然環境とどのような関わりがあるのだろうか

イ 研究仮説を具現化するための手立て

「衣食住の3視点から整理するためのシンキングツールの活用」

本単元では、人々の生活を衣食住の3つの観点から整理するために「Yチャート」を活用した。まとめる際、気付いたこと(事実)を黒、そこから考えられる自然環境との関わり(分析)を赤で記入させ、事実と分析を視覚化した。

最初は事実しか読み取れなかったグループも、事実から推測して考え、自然環境がどのように人々の生活に影響を与えるのかを、分析することができるようになった。

#### 「ホワイトボードとタブレットのハイブリッド活用」

前年度の反省として、タブレットを活用したグループワークでは対話が促進されないという課題があった。そこで、本単元では、ホワイトボードにYチャートを書いてまとめ、提出や共有の際にロイロノートの提出箱や画面共有の機能を活用した。このようなハイブリッド活用により、グループ内での積極的な対話と、情報を比較して考える学びを両立することができた。

### ④ 個人の尊重と日本国憲法(中3・公民的分野)

ア 課題 すべての人が共に生きる社会の実現のために必要なことは何か

イ 研究仮説を具現化するための手立て

#### 「様々な差別について、より深く追究するジグソー学習」

本単元では、基本的人権の根幹である平等権をおびやかす様々な差別について取り上げ、小グループで追究し、まとめる方式でジグソー学習を行った。他のグループの発表を聴く際に、「差別の共通点は何か」「共生社会の実現のために必要なこと、できることは何か」という視点を与えた。単なる知識の共有ではなく、差別の本質をとらえ、平等権が重要である理由を多面的・多角的に考察する姿が多く見られた。

生徒の振り返りより(一部抜粋)

- ・どの問題にも共通しているのは、正当な理由がない差別や偏見だということです。これらの問題を解決するために必要なことは、自分事として理解を深めることだと思いました。現状と向き合い、どのような人とも一人の人間として接することで共生社会の実現への第一歩を踏み出していきたいです。
- ・どの差別も偏見や、正しい知識をもたないことから起こっていることがわかりました。一人一人がもつ多様性を認め合うことで、個性をつぶさず個性を武器にできる社会になっていくと思うし、そんな社会にしていきたいと思います。
- ・どの差別も相手のことを理解しようとしていないから起こっていると思いました。差別をなくしていくためにも、「〇〇だから」などの固定概念をなくし、個人を尊重していくことを社会全体で進めていく必要があると思いました。
- ・差別は人と人との違いによって生み出されていることをみんなが自覚し、その違いを認めあい、寄り添いあうことが必要だ。そのために、様々な「違い」に関心をもち、助け合えるようになりたい。差別のない平等な社会が実現すれば、すべての人にとって生きやすい世の中になると思う。その実現のためにできることから始めたい。

#### 「ロイロノート「共有ノート」を活用した対話のある学び」

各グループが学んだ内容をまとめる際に「共有ノート」による共同編集を行った。タブレットを用いることで、資料を活用した視覚的なプレゼンテーションが容易になった。図11のように、同じ画面を見ながら複数の生徒が同時に編集できるため、生徒同士の対話が増加し、よりよい考えを練り上げる姿がみられた。

さらに、教師側のタブレットからも各グループの状況が確認できるため、個へのアプローチの量・質ともに向上した。

個へのアプローチの例

- ・社会的事象の認識が不十分な生徒へのサポート
- ・話し合いや編集作業が滞っている班への声掛け
- ・追加資料の提示や共有

## 5 成果と課題

### (1) 成果

#### ① 定期テスト等の結果から

令和3年度の実践を終え、実践前のテストと比較すると、知識・技能の平均正答率の上昇割合より、思考・判断・表現の平均正答率の上昇割合が大きく向上した。また、実践前に比べ、記述問題の無答が減り、論立てされた記述が多く見られるようになった。

また、令和4年度、令和5年度についても、NRTの結果は右肩上がりであり、課題であった思考力・判断力・表現力の数値も向上している。定期テストでも、短文記述の無答がほぼなくなり、入試レベルの設問に対しても半数以上の生徒が正答できるようになってきている。

このように、対象生徒については、確かな学力を身に付け、特に、思考力、判断力、表現力について、確実な向上が見られる。

- ② 生徒アンケートから  
 生徒の肯定的な評価（令和3年度アンケートより）  
 「資料の読み取りや、自分の考えを表現することがしやすくなった」・・・87.7%  
 「課題に対する自分の考えをもてるようになった」・・・85.7%  
 以上の結果からタブレットの活用により、生徒の苦手意識は大きく減少することが分かった。  
 加えて、「これまでのようにノートに書くよりも気楽に取り組めて良い」「気付いたことのメモ  
 や地図上の書き込みを、間違えたときにすぐに消せて良い」という意見もあった。  
 さらに実践を続けた生徒の令和5年度のアンケートからは、  
 「資料の読み取りや、自分の考えを表現することがしやすくなった」・・・100%  
 「課題に対して自分の考えをもてるようになった」・・・97.1%

生徒のアンケート記述より（一部抜粋）

- ・すぐに調べることができるし、共有ノートでは他の人の意見やスライドの作り方を見ることができる。
- ・自分が課題に対して考えている意見をクラスみんなに共有できる。
- ・頭の中に入ったと言う思い込みだけではなく、みんなの前で発表することで、説明力もつくし、さらにその内容について身につけることができる。
- ・僕は字が汚いのでタブレットでやることで見返すことができるので助かっています。
- ・ある物事についてより深く知れることや、短時間で簡単にまとめることができるところが良さだと思います。

アンケート結果から、継続した実践を行うことで、令和3年度よりも数値が向上していることがわかる。また、生徒の記述からは、学びのインプットをサポートするツールとしての機能だけでなく、学びをアウトプットするツール、学びを蓄積するツールとしての効果を感じる生徒が増えていることがわかる。このように生徒は、社会科の苦手意識を克服し、意欲的に学習活動に臨むようになってきている。

- ③ 生徒の記述の変化から  
 資料を限定し、気付きを具体的に書かせたことで、根拠を具体的に示して話すようになった。また、複数の資料を意図的に関連付けさせたことで、生徒は多面的・多角的に思考を働かせて自分の気付きや考えを記述することができた。  
 タブレット上で蓄積することで、単元末の振り返りの際に自己の変容が一目瞭然で、資料から考えることの有効さを実感した記述が多く見られた。  
 また実践を続け、「学び方」を繰り返し活用させていく中で、生徒には、特に指示が無くても「比較」したり、「資料と関連付け」たり、「対話をとおしてよりよい考えを練り上げ」たりする姿が見られるようになった。「学び方」を身に付け、活用できる力が育ってきていることが伺えている。

## (2) 課題

令和3年度の実践では教師主導での資料の分析・関連付けが多く、生徒が自ら資料を探したり、関連付けたりする場面が少なかった。令和4年度からは、意図的に生徒自らが行う探求活動の場面を増やし、生徒が、主体的に「学び方」を活用できるよう、思考ツールを活用させるなど、適切にサポートするように工夫している。

しかし、生徒がどの程度社会科の「学び方」を身に付けて、それを実感しているのかが見取れていない。「学習スキル」のような形で、生徒に「見える化」し、より意識させるような手立てが必要であった。

タブレットを活用することで、授業の効率化が図られ、教師側の利便性は向上している。今後も、本実践の反省を生かしながら、引き続きタブレットを活用した授業づくりを推進し、生徒の思考力・判断力・表現力の向上を目指していく。

## 6 参考文献

文部科学省「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた ICT 活用の在り方と質的評価-平成 29 年度 ICT 活用推進校の取組より-」

文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編」

株式会社 LoiLo「シンキングツールを学ぶ」

株式会社 LoiLo「シンキングツール（思考ツール）授業案 社会での活用ポイント」

澤井陽介・加藤寿朗「見方・考え方 社会科編」東洋館出版社（2017）

峯 明秀・唐木清志「見方・考え方を鍛える社会科授業デザイン」明治図書（2020）